

深層学習の Wasserstein 幾何学的解析にむけた取組み*

園田 翔[†] 村田 昇

早稲田大学 先進理工学部

Sonoda Sho Noboru Murata

School of Advanced Science and Engineering

Waseda University

1 はじめに

深層ニューラルネットはどのように情報を処理しているのだろうか？ 発表者らが推進する深層ニューラルネットの輸送解析では、ニューラルネットの中間層を輸送写像とみなし、輸送の性質によってニューラルネットを分類する。別の言い方をすれば、多層の中間層を特徴量写像の合成写像が為す力学系として捉え、輸送軌道によってニューラルネットを特徴付ける。ニューラルネットのパラメータは値が異なっても同じ写像を表すことがあるので、パラメータに基づくニューラルネットの解析は困難である。また、パラメータに沿った最小二乗法では大域最適を見つけることも困難である。一方、輸送軌道はパラメータとは独立な幾何学的対象であるので、ニューラルネットの写像としての性質を調べるのに有効である。

これまでに、Gaussian denoising autoencoder (DAE) と呼ばれる深層ニューラルネットの一種が、データ分布のエントロピーを減らす方向に輸送する写像であることが分かっている。本研究の目的は、一般の雑音分布による DAE や、教師あり学習による深層ニューラルネットを輸送写像として記述することである。

2 Denoising Autoencoder

Denoising Autoencoder (DAE) は、深層ニューラルネットの輸送解析を動機付ける基本的なクラスである。DAE とは、訓練データにわざと雑音を加え、雑音を除去するようにニューラルネットを訓練するオートエンコーダーの亜種である [Vincent et al., 2008]。

* 科研費シンポジウム「大規模複雑データの理論と方法論、及び、関連分野への応用」

[†] sho.sonoda@aoni.waseda.jp

2.1 DAE の学習手続き

$\mathbf{x} \sim \pi$ を \mathbb{R}^m に値をとるデータ, $\varepsilon \sim \nu_t$ を平均 0 分散共分散行列 tI の加法雑音として, $\tilde{\mathbf{x}}$ を雑音が付加された観測データ

$$\tilde{\mathbf{x}} = \mathbf{x} + \varepsilon \quad (1)$$

とする。DAE の学習手続きでは, 学習機 \mathbf{g} に $\tilde{\mathbf{x}}$ を提示して, \mathbf{x} を推定させる。

本来, 雑音は学習機のロバスト性を強化したり, データを増強したりする目的で導入されたが, このように雑音を除去する学習法によって訓練された学習機は, 結果として雑音を補正する機能を獲得することになる。本研究では, この補正項を輸送作用とみなして, 深層ニューラルネットの特徴付けを行う。

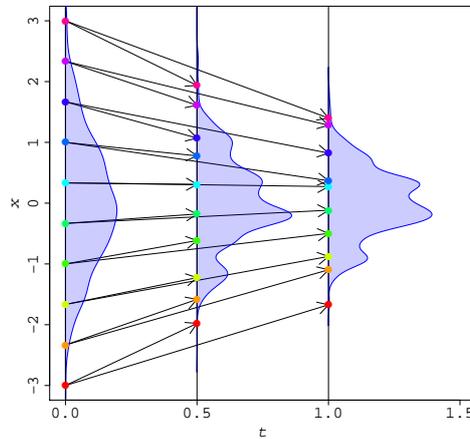


図 1 DAE はデータ点を輸送する写像とみなせる。左から元のデータ分布 π_0 , $\mathbf{g}_{0.5}$ によって輸送されたデータ点の分布 (押出測度) $\pi_{0.5}$, $\mathbf{g}_{1.0}$ によって輸送されたデータ点の分布 $\pi_{1.0}$ 。 t 軸は雑音の分散を表し, 輸送解釈では輸送時間に対応する。 x 軸はデータ空間 \mathbb{R}^1 を表す。データ分布は正規分布 $\mathcal{N}(0, 1)$, 雑音分布も正規分布 $\mathcal{N}(0, t)$ である。雑音が強いほど, 押出測度の分散は小さくなる。本研究の解析を通じて, 正規雑音の場合には, 厳密には分散ではなくエントロピーを減らすように輸送していることが明らかとなる。

2.2 DAE の輸送写像 (変分法による定式化)

通常, ニューラルネットは最小二乗法によって学習させるので, DAE は次の最適化問題 (変分問題) と等価である:

$$\min_{\mathbf{g}} \mathbb{E}_{\pi} \mathbb{E}_{\nu_t} |\mathbf{g}(\mathbf{x} + \varepsilon) - \mathbf{x}|^2. \quad (2)$$

ただし \mathbf{g} は十分広いクラスの関数を表現でき, 停留点を達成できるものとする。

この変分問題は変分計算を用いて停留点 \mathbf{g}_t^* を求めることができ、以下のようなになる [Sonoda and Murata, 2016, 2017]

$$\mathbf{g}_t^*(\mathbf{x}) = \mathbf{x} - \frac{1}{\nu_t * \pi(\mathbf{x})} \int_{\mathbb{R}^m} \varepsilon \nu_t(\varepsilon) \pi(\mathbf{x} - \varepsilon) d\varepsilon. \quad (3)$$

ただし $*$ は畳み込み積分を表す:

$$\nu_t * \pi(\mathbf{x}) = \int_{\mathbb{R}^m} \nu_t(\varepsilon) \pi(\mathbf{x} - \varepsilon) d\varepsilon. \quad (4)$$

DAE の式 (3) の意味を考えてみよう。まず、第一項は恒等写像であるから、オートエンコーダーとしての性質を表している。一方、第二項は雑音除去に伴って現れた補正項である。従って、DAE はデータ点 \mathbf{x} を補正項の方向に輸送する輸送写像とみなせる。

以下では (3) の導出を説明する。まず、変分問題の目的関数を汎関数 $L[\mathbf{g}] := \mathbb{E}_\pi \mathbb{E}_{\nu_t} |\mathbf{g}(\mathbf{x} + \varepsilon) - \mathbf{x}|^2$ とおく。次に、任意の関数 \mathbf{h} に対し、 \mathbf{g} における汎関数 L の \mathbf{h} 方向変分 $\delta L_{\mathbf{h}}[\mathbf{g}]$ を計算する。最初に、 L の積分変数を変換し、積分順序を変更する

$$\begin{aligned} L[\mathbf{g}] &= \int_{\mathbb{R}^m} \int_{\mathbb{R}^m} |\mathbf{g}(\mathbf{x} + \varepsilon) - \mathbf{x}|^2 \nu_t(\varepsilon) \pi(\mathbf{x}) d\mathbf{x} d\varepsilon \\ &= \int_{\mathbb{R}^m} \int_{\mathbb{R}^m} |\mathbf{g}(\mathbf{x}) - \mathbf{x} + \varepsilon|^2 \nu_t(\varepsilon) \pi(\mathbf{x} - \varepsilon) d\varepsilon d\mathbf{x}. \end{aligned}$$

すると、 $\delta L_{\mathbf{h}}[\mathbf{g}]$ は以下のように計算される

$$\begin{aligned} \delta L_{\mathbf{h}}[\mathbf{g}] &= \left. \frac{d}{ds} L[\mathbf{g} + s\mathbf{h}] \right|_{s=0} \\ &= 2 \int_{\mathbb{R}^m} \left[\int_{\mathbb{R}^m} [\mathbf{g}(\mathbf{x}) - \mathbf{x} + \varepsilon] \nu_t(\varepsilon) \pi(\mathbf{x} - \varepsilon) d\varepsilon \right] \mathbf{h}(\mathbf{x}) d\mathbf{x}. \end{aligned}$$

停留点 \mathbf{g}_t^* においては任意の \mathbf{h} 方向に対して $\delta L_{\mathbf{h}}[\mathbf{g}_t^*] \equiv 0$ が成り立つ。従って、変分法の基本補題によって被積分関数がほとんど至る所 0 になることが言える

$$\int_{\mathbb{R}^m} [\mathbf{g}_t^*(\mathbf{x}) - \mathbf{x} + \varepsilon] \nu_t(\varepsilon) \pi(\mathbf{x} - \varepsilon) d\varepsilon = 0, \quad \text{a.e. } \mathbf{x} \in \mathbb{R}^m. \quad (5)$$

この方程式を \mathbf{g}_t^* に関して解いて、変分問題 (2) の停留点として (3) が得られる

2.3 DAE の輸送写像 (統計的推定問題として定式化)

DAE の学習手続きは平均の推定と等価であることに注意すると、DAE 輸送写像 (3) は事後平均 (posterior mean) $\mathbb{E}[\mathbf{x} | \tilde{\mathbf{x}}]$ であることが分かる。すなわち、事後平均は

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[\mathbf{x} | \tilde{\mathbf{x}}] &= \frac{\int_{\mathbb{R}^m} \mathbf{x} p(\tilde{\mathbf{x}} | \mathbf{x}) p(\mathbf{x}) d\mathbf{x}}{\int_{\mathbb{R}^m} p(\tilde{\mathbf{x}} | \mathbf{x}') p(\mathbf{x}') d\mathbf{x}'} \\ &= \frac{\int_{\mathbb{R}^m} \mathbf{x} \nu_t(\tilde{\mathbf{x}} - \mathbf{x}) \pi(\mathbf{x}) d\mathbf{x}}{\int_{\mathbb{R}^m} \nu_t(\tilde{\mathbf{x}} - \mathbf{x}') \pi(\mathbf{x}') d\mathbf{x}'} \end{aligned} \quad (6)$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{\nu_t * \pi(\tilde{\mathbf{x}})} \int_{\mathbb{R}^m} (\tilde{\mathbf{x}} - \boldsymbol{\varepsilon}) \nu_t(\boldsymbol{\varepsilon}) \pi(\tilde{\mathbf{x}} - \boldsymbol{\varepsilon}) d\boldsymbol{\varepsilon}, \quad \mathbf{x} \leftarrow \tilde{\mathbf{x}} - \boldsymbol{\varepsilon} \\
&= \tilde{\mathbf{x}} - \frac{1}{\nu_t * \pi(\tilde{\mathbf{x}})} \int_{\mathbb{R}^m} \boldsymbol{\varepsilon} \nu_t(\boldsymbol{\varepsilon}) \pi(\tilde{\mathbf{x}} - \boldsymbol{\varepsilon}) d\boldsymbol{\varepsilon}, \tag{7}
\end{aligned}$$

となるので、 $\mathbf{g}_t^*(\tilde{\mathbf{x}}) = \mathbb{E}[\mathbf{x} \mid \tilde{\mathbf{x}}]$ が分かる。なお、事後平均の途中式として現れた (6) は、雑音が加法的でない場合にも成り立つ式であり、Alain and Bengio [2014] はこの形式を用いて DAE を解析した。一方、(3) は第一項 (\mathbf{x}) が出発地点、第二項が変位ベクトルに対応し、全体として出発地点から変位ベクトルの分だけ移動する、という輸送写像としての形式が陽に現れている。本研究では、後者の形式を軸として解析を行う。縮小推定量の文脈などでは、(3) は事後平均の Brown 表現 (Brown's representation of the posterior mean) としても知られている [George et al., 2006]。

2.4 正規雑音 DAE の輸送写像

正規雑音の場合には (3) をさらに簡約化できる [Sonoda and Murata, 2016]。まず、雑音分布を平均 0 分散共分散行列 tI の正規分布とする

$$\nu_t(\boldsymbol{\varepsilon}) = \frac{1}{(2\pi t)^{m/2}} \exp\left(-\frac{|\boldsymbol{\varepsilon}|^2}{2t}\right). \tag{8}$$

このとき、以下の恒等式 (Stein's identity) が成り立つ

$$\boldsymbol{\varepsilon} \nu_t(\boldsymbol{\varepsilon}) = -t \nabla \nu_t(\boldsymbol{\varepsilon}). \tag{9}$$

この恒等式が成り立つのは正規分布の場合に限る。

従って、(3) は以下のように簡略化できる

$$\begin{aligned}
\mathbf{g}_t^*(\mathbf{x}) &= \mathbf{x} - \frac{1}{\pi * \nu_t(\mathbf{x})} \int_{\mathbb{R}^m} \boldsymbol{\varepsilon} \pi(\mathbf{x} - \boldsymbol{\varepsilon}) \nu_t(\boldsymbol{\varepsilon}) d\boldsymbol{\varepsilon} \\
&= \mathbf{x} + \frac{t}{\pi * \nu_t(\mathbf{x})} \int_{\mathbb{R}^m} \pi(\mathbf{x} - \boldsymbol{\varepsilon}) \nabla \nu_t(\boldsymbol{\varepsilon}) d\boldsymbol{\varepsilon} \\
&= \mathbf{x} + \frac{t \nabla \pi * \nu_t(\mathbf{x})}{\pi * \nu_t(\mathbf{x})} \\
&= \mathbf{x} + t \nabla \log[\pi * \nu_t](\mathbf{x}). \tag{10}
\end{aligned}$$

この式の意味するところは以下のとおりである。すなわち、正規雑音 DAE において雑音が付加されたデータの分布は $\pi * \nu_t$ で与えられるので、そのスコア $-\nabla \log[\pi * \nu_t]$ に相当する量を補正せよという意味である。

3 輸送に伴うデータ分布の変化

前節の解析を通じて、深層ニューラルネットを輸送写像としてモデル化する動機付けを行った。本節では一旦 DAE を離れ、一般の輸送写像 \mathbf{g}_t とデータ分布 π_0 が与えられた場合

に、データ点 \mathbf{x} の輸送に伴ってデータ分布が変形していく過程について説明する。変形後のデータ分布は押出測度と呼ばれるものであり、 $\mathbf{g}_{t\#}\pi_0$ と書くこともあるが、誤解の恐れのない限りは単に π_t と書く。

3.1 連続方程式

データ点の輸送に伴い、全データ点の総量は保存するものとする。この条件は、 π_0 と π_t がともに確率測度になるために必要である。位置 \mathbf{x} 時刻 t における輸送速度を $\mathbf{v}_t(\mathbf{x})$ と書くことにする。質量が保存するという仮定から直ちに、 π_t の時間発展法則は連続方程式 (continuity equation)

$$\partial_t \pi_t(\mathbf{x}) = -\nabla \cdot [\pi_t(\mathbf{x}) \mathbf{v}_t(\mathbf{x})], \quad \mathbf{x} \in \mathbb{R}^m, t \geq 0 \quad (11)$$

に従うことが分かる*1。ここで、 $\nabla \cdot$ は発散作用素を表す。

3.2 連続方程式を導く Wasserstein 勾配流

連続方程式と Wasserstein 勾配流の間には対応付けが知られている。従って、輸送写像は連続方程式という偏微分方程式だけでなく、Wasserstein 勾配流という発展方程式としても特徴付けができる。つまり、連続方程式に従ってデータ分布 π_t が時間発展する様子は、Wasserstein 空間上の曲線 (軌道) $t \mapsto \pi_t$ として理解できる。Wasserstein 勾配流の基礎づけについては補遺を参照せよ。

連続方程式 (11) において、ベクトル場 \mathbf{v}_t がポテンシャル関数 $V_t: \mathbb{R}^m \rightarrow \mathbb{R}$ の勾配として与えられる場合を考える:

$$\mathbf{v}_t(\mathbf{x}) = \nabla V_t(\mathbf{x}), \quad t > 0, \mathbf{x} \in \mathbb{R}^m. \quad (12)$$

さらに、 \mathcal{F} と V_t とは、以下の関係式を満たすように選ばれているものとする

$$\frac{d}{dt} \mathcal{F}[\pi_t] = \int_{\mathbb{R}^m} V_t(\mathbf{x}) \partial_t \pi_t(\mathbf{x}) d\mathbf{x}, \quad \pi_t \in \mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m) \quad (13)$$

このとき、Wasserstein 幾何学の基本的な結果 [Villani, 2009, Ex.15.10] により、 \mathcal{F} による Wasserstein 勾配流 π_t は、 ∇V_t による連続方程式を満たすことが知られている。

$$\partial_t \pi_t(\mathbf{x}) = -\nabla \cdot [\pi_t(\mathbf{x}) \nabla V_t(\mathbf{x})], \quad t \geq 0, \mathbf{x} \in \mathbb{R}^m. \quad (14)$$

連続方程式を特徴付ける速度場 \mathbf{v}_t は時間に依存するが、Wasserstein 勾配流を特徴付けるポテンシャル汎関数 \mathcal{F} は時間に依存しないので、複雑な輸送過程を扱う場合にも威力を発揮することが期待される。実際、後に例として述べる通り、ポテンシャル汎関数にはエントロピーなどのよく知られた汎関数が登場する。

*1 厳密には π_t は確率密度関数の変数変換の公式を通じて計算する。

4 正規雑音 DAE の輸送解析

正規雑音 DAE を例に取り，輸送解析を行う。

4.1 初速度ベクトルの解析

まず，正規雑音 DAE 輸送写像 (10) の“初速度”ベクトルは次のように計算できる

$$\begin{aligned}\partial_t \mathbf{g}_{t=0}^*(\mathbf{x}) &= \nabla \log[\pi * \nu_{t=0}](\mathbf{x}) + 0 \cdot \nabla \log[\pi * \partial_t \nu_{t=0}](\mathbf{x}) \\ &= \nabla \log \pi(\mathbf{x}).\end{aligned}\tag{15}$$

ただし，正規分布の性質 $\lim_{t \rightarrow 0} \nu_t = \delta$ を用いた。すなわち，正規雑音 DAE の場合，輸送に伴う初速度ベクトルはスコアで与えられるのである。この性質は $t \rightarrow 0$ に限ることに注意せよ。つまり，一般の $t > 0$ の場合には初速度ベクトルはスコアにはならない。

次に， $t \rightarrow 0$ におけるデータ分布の変形法則が逆拡散方程式に従うことを示す。正規雑音 DAE 輸送写像の初速ベクトル場は (15) で与えられたので，連続方程式 (11) に $\mathbf{v}_0 = \nabla \log \pi_0$ を代入して以下を得る

$$\begin{aligned}\partial_t \pi_{t=0}(\mathbf{x}) &= -\nabla \cdot [\pi_0(\mathbf{x}) \nabla \log \pi_0(\mathbf{x})] \\ &= -\nabla \cdot [\nabla \pi_0(\mathbf{x})] \\ &= -\Delta \pi_0(\mathbf{x}).\end{aligned}\tag{16}$$

すなわち，正規雑音 DAE の場合， $t \rightarrow 0$ における輸送に伴うデータ分布の変形法則は逆拡散方程式 $\partial_t \pi_{t=0}(\mathbf{x}) = -\Delta \pi_0(\mathbf{x})$ に従うのである。

最後に，正規雑音 DAE はエントロピーを減らすようにデータ点を輸送する写像であることを示す。熱方程式 $\partial_t \pi_t = \Delta \pi_t$ の解はエントロピー汎関数

$$\mathcal{H}[\pi] := - \int_{\mathbb{R}^m} \pi(\mathbf{x}) \log \pi(\mathbf{x}) d\mathbf{x}\tag{17}$$

を汎関数とする Wasserstein 勾配流 $\frac{d}{dt} \pi_t = \text{grad } \mathcal{H}[\pi_t]$ の解であることが知られている。実際，(15) からポテンシャル関数は $V_t = \log \pi_t$ となることが予想され，直ちに (13) を満たすことが分かる。このことから，逆拡散方程式 (16) はエントロピーを減らす勾配流

$$\frac{d}{dt} \pi_0 = -\text{grad } \mathcal{H}[\pi_0]\tag{18}$$

に対応することが分かる。すなわち，DAE 輸送写像 \mathbf{g}^* はデータ分布 π のエントロピーを減らすように輸送する写像である。

逆拡散やエントロピー減少の意味を考えてみよう。逆拡散方程式において，時間変数の正負を反転すると通常の熱方程式が得られる。従って，逆拡散方程式は拡散現象を時間逆向きに遡る現象を記述している。自然界の多くの系は，エントロピーが増大する方向に発展するので，これは不自然な現象である。このようなことが起こるのは，DAE の訓練過程が雑音除去であり，本質的に逆問題を解いていることから納得される。

4.2 深層正規雑音 DAE

ここまで、 $t \rightarrow 0$ の極限を考えてきた。一般の時刻 $t > 0$ においては、正規雑音 DAE と言えども、スコアや逆拡散方程式、エントロピー勾配流のような著しい性質は損なわれる。このことを Wasserstein 空間 $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ 上で考えてみよう。正規雑音 DAE に伴うデータ分布 π_t の時間発展は、初速のみエントロピー勾配方向 $\text{grad } \mathcal{H}[\pi_t]$ を向いているが、時刻 t の発展とともに次第に勾配流から乖離していく。

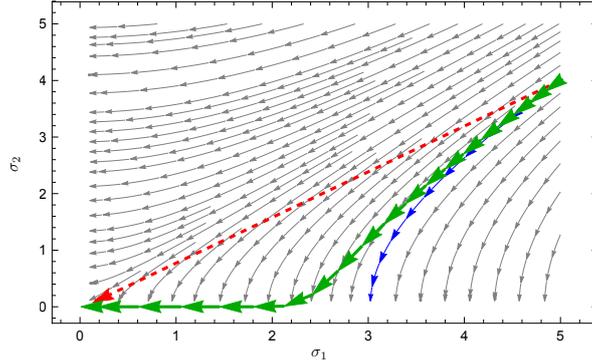


図 2 正規雑音 DAE の時間発展法則はエントロピーを汎関数とする Wasserstein 空間上の勾配流 (グレー) になっている。ただし、DAE が勾配流に沿うのは初速のみであり、その後は勾配流から乖離する (赤)。繰り返し DAE の訓練と合成を繰り返すことにより、エントロピー勾配流に近い折れ線が得られる (緑)。これが深層 DAE である。無限小時間 DAE を無限に合成した極限として、各点がエントロピー勾配流に一致している連続 DAE が得られる (青)。

そこで、一回の正規雑音 DAE を短時間 Δt に抑えて、得られたデータ分布に対して再び正規雑音 DAE を適用することを考える。すると、 L 回の繰り返しで L 層の深層 DAE

$$\mathbf{g}^{L:1} := \mathbf{g}^L \circ \dots \circ \mathbf{g}^1 \quad (19)$$

が得られる。特に、各層において初速はエントロピー勾配流に従う。こうして得られる $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ 上の軌跡は、エントロピー勾配流の折れ線近似 (接線近似, Euler 近似) である。

さらに、 $\Delta t \rightarrow 0$ の無限小極限では、連続無限層の DAE \mathbf{g}_t が得られる。すなわち、連続無限層正規雑音 DAE は、任意の時刻 $t \geq 0$ において以下の性質を満たす理想的な輸送写像である

$$\partial_t \mathbf{g}_t(\mathbf{x}) = \nabla \log \pi_t(\mathbf{x}), \quad (20)$$

$$\partial_t \pi_t(\mathbf{x}) = -\Delta \pi_t(\mathbf{x}), \quad (21)$$

$$\frac{d}{dt} \pi_t = -\text{grad } \mathcal{H}[\pi_t]. \quad (22)$$

一般に、始点と終点は等しいが、途中の輸送経路が異なるような連続輸送写像は無数に存在する。このような不定性により、深層ニューラルネットは学習過程で輸送経路が迷子にな

る可能性が高い。連続 DAE は、エントロピー勾配流（連続力学系）によって各時刻での振り舞いまで規定されているので、輸送経路の不定性が排除されている。従って、エントロピー汎関数は深さ方向の正則化項の役割を担っていることが分かる。

5 一般の深層ニューラルネットの輸送解析に向けて

本節では、一般の深層ニューラルネットを取り上げ、輸送解析の展望を紹介する。

5.1 Tsallis エントロピー勾配流

Tsallis エントロピーは以下で与えられる

$$\mathcal{H}^q[\pi] := - \int_{\mathbb{R}^m} \frac{\pi^q(x) - \pi(x)}{q-1} dx.$$

このとき、 $V_t = -\frac{q}{q-1}\pi_t^{q-1}$ であり、 $\text{grad } \mathcal{H}^q[\pi_t](x) = \Delta \pi_t^q(x)$ が分かる。従って、 $-\text{grad } \mathcal{H}^q$ に対応する連続方程式は“逆”多孔媒質方程式（backward porous medium equation）である [Villani, 2009, Ex.15.6]

$$\partial_t \pi_t = -\Delta \pi_t^q. \quad (23)$$

このとき、雑音分布は q -正規分布になることが予想されるが、証明には至っていない。

5.2 教師有りニューラルネット

教師有り学習では、各データ点 \mathbf{x} にラベルが付与されている。輸送に伴い、同じラベル同士の点は近づき、異なるラベル同士の点は遠ざかることが期待される。このような輸送現象は多成分系の拡散現象として記述できる。

$$\partial_t \boldsymbol{\mu}_t = \Delta \boldsymbol{\mu}_t + \mathbf{R}(\boldsymbol{\mu}_t). \quad (24)$$

ただし $\boldsymbol{\mu}_t$ の各成分はラベル毎の質量濃度を表す。

5.3 ConvNet

ResNet や Highway Network に見られるスキップコネクションは、ConvNet を著しく深くするためのヒューリスティクスとして不可欠である。スキップコネクションは輸送写像を陽に表した形式 $\mathbf{x} + \mathbf{f}(\mathbf{x})$ であるから、ConvNet においても輸送解析が展開できることを示唆している。

6 まとめ

輸送写像とみなすことで、深層ニューラルネットは \mathbb{R}^m 上や Wasserstein 空間 $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ 上の軌道に対応付けられる。通常の深層ニューラルネットは、連続ニューラルネットの折れ線近似とみなせる。正規雑音 DAE の例では、輸送写像が解析的に求まることを示し、エントロピー汎関数が深さ方向の正則化を担っていることを見た。一般の輸送写像の場合にも、学習の手続きと、輸送を規定する汎関数との対応を付けることで、深層学習の解釈性向上に貢献することが期待される。

付録 A 連続方程式と Wasserstein 勾配流

\mathbb{R}^m 上の L^2 -Wasserstein 空間 $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ とは、 \mathbb{R}^m 上の絶対連続かつ 2 次モーメントが存在する確率測度の空間に、 L^2 -Wasserstein 計量 \mathbf{g} という無限次元 Riemann 計量を導入した関数多様体である。例えば、一つの確率分布 π は $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ の一点に相当する。パラメタ付けられた確率分布族 ($\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ 上の曲線) π_t $t \in [0, 1]$ の時間微分 $\partial_t \pi_{t=0}$ は、 π_0 における接ベクトル $\dot{\pi}_0$ に対応する。特に、 $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ は Riemann 多様体なので、勾配作用素 grad や勾配流が定義できる [桑江一洋 et al., 2015]。

Wasserstein 空間 $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ 上の汎関数 \mathcal{F} による Wasserstein 勾配流とは、以下の発展方程式の解 π_t である

$$\frac{d}{dt} \pi_t = \text{grad } \mathcal{F}[\pi_t], \quad \pi_t \in \mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m). \quad (25)$$

ただし π_t が $\mathcal{W}_2(\mathbb{R}^m)$ の点であることを強調して、偏微分 ∂_t ではなく常微分 d/dt を用いている。

参考文献

- G. Alain and Y. Bengio. What Regularized Auto-Encoders Learn from the Data Generating Distribution. *Journal of Machine Learning Research*, 15:3743–3773, 2014.
- E. I. George, F. Liang, and X. Xu. Improved minimax predictive densities under Kullback–Leibler loss. *Annals of Statistics*, 34(1):78–91, 2006.
- S. Sonoda and N. Murata. Decoding Stacked Denoising Autoencoders. arXiv:1605.02832 2016.
- S. Sonoda and N. Murata. Transportation analysis of denoising autoencoders: a novel method for analyzing deep neural networks. In *NIPS Workshop on Optimal Transport & Machine Learning*, pages 1–10, Long Beach, 2017.
- C. Villani. *Optimal Transport: Old and New*, Springer-Verlag Berlin Heidelberg, 2009.
- P. Vincent, H. Larochelle, Y. Bengio, and P. -A. Manzagol. Extracting and Composing Robust Features with Denoising Autoencoders. In *ICML-08*, pages 1096–1103, Helsinki, 2008.
- 桑江一洋, 塩谷隆, 太田慎一, 高津飛鳥, and 桑田和正. 最適輸送理論とリッチ曲率. In 中央大学理工学部数学教室, editor, 第 63 回 *ENCOUNTER with MATHEMATICS*, page 115, 2015.